韓国伝統舞踊 人間国宝後継者
四国八十八ヶ所霊場 第十三番札所「大日寺」住職

金 昴先

キム ミョウソン

人間の出会い・ご縁は、運命だなと思うんです。
韓国で舞踊家としての地位を確立していた私が
日本で僧侶となったことを、私は後悔していません。

キム・ミョウソン
韓国伝統舞踊「僧舞」人間国宝後継者。四国八十八ヶ所霊場 第十三番札所「大日寺」住職。1957年韓国生まれ。1976年より韓国舞踊の人間国宝・李梅芳氏に師事。1988年、韓国仁川市に金昴先舞踊団を設立。1996年徳島で舞踊公演した際に大日寺住職大栗弘栄氏と出会い、結婚、徳島へ。2007年4月に夫が急死したため、その跡を継いで一から修行をして翌年、四国八十八ヶ所で初の外国籍の住職となった。2005年人間国宝後継者に指名される。2011年、大韓民国文化勲章受章。

（右ページ写真）小鼓の舞
（写真）僧舞「これは僧侶の舞です。衣装は絹で、坊主頭なので帽子をかぶっている。音楽も踊り始めは木魚があります。若い者が修行に入って様々な葛藤、煩悩から、解脱していく姿を表現しています。」
（8・10・21ページ以外の写真はすべて、金昴先氏提供）

世界一美しい言葉「ありがとう」の文化を世界遺産に

巻頭対談

韓国伝統舞踊 人間国宝後継者
四国八十八ヶ所霊場 第十三番札所
「大日寺」住職
金 昴先

武道家・UK実践塾代表
宇城憲治

『どうやって世界を平和にできるのか』を
考え続け、わかったことがあります。
それは『日本が頑張ったら世界の平和が実現する』
ということです。

お遍路さんたちとともに　第十三番札所 大日寺にて

世界各国を舞台に活躍する韓国を代表する伝統舞踊家であり、またお遍路で有名な四国八十八ヶ所霊場において唯一外国籍をもつ住職・金昂先さん。

十三番札所「大日寺」住職であった夫の急死に急展開した金さんの運命。その苦難の始まりは、「父の後を継ぎたい」という一人息子の思いに応えるために、言葉も文化もわからないなか、まずは自らが住職になることであった。

その金さんが現在目指していることが、「四国八十八ヶ所を世界遺産に」という夢だ。日本人以上に日本を愛する金さんの、夢の実現に向けた具体的な行動とそのバイタリティーは、自信と誇りを失いかけた私たち日本人に、たくさんの元気と勇気を与えるものであった。

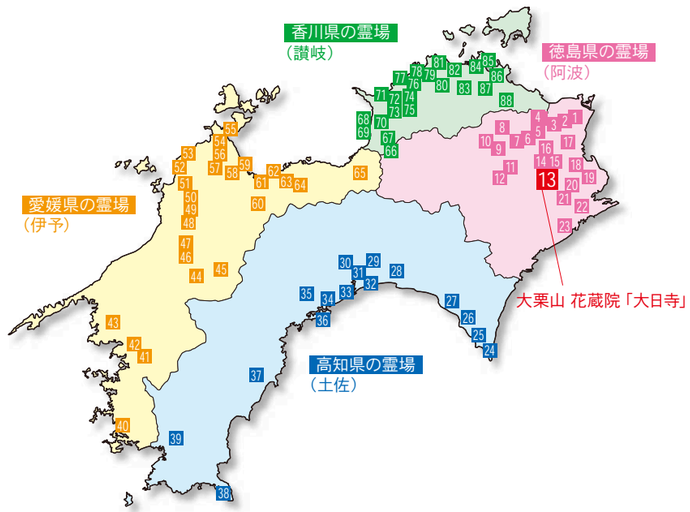
取材　2013年11月11日　徳島県「大日寺」にて

四国八十八ヶ所霊場

奈良時代の774年、讃岐（さぬき）の国（現在の香川県）に生まれた弘法大師・空海が、今から約1200年前、42歳の時に人々に災難を除くために開いたのが、この四国霊場と言われている。開創初期の札所は、修行僧や行者が訪れる場所で、弘法大師の高弟が大師の足跡を遍歴したのが、霊場巡りの始まりとされている。人間には煩悩が八十八あり、霊場を八十八ヶ所巡ることによって煩悩が消え、願いが叶うとされた。江戸時代には民間人によるお遍路が盛んとなり、現在にまで伝えられている。

四国八十八ヶ所の総行程は約1400㎞。徒歩で巡る「歩き遍路」のほか、現代ではバスツアーや車・バイクで巡るなど、方法は多様化している。

地元では、人々が「お大師様に帰依（きえ）する者」として遍路者を温かく迎え、食べ物や飲み物を無償で提供するなど、「お接待」の伝統が根づいている。



お遍路姿は白装束が基本。（省略する方は洋服の上に白衣と輪袈裟を着け、白の靴でも良い。）袈裟は必ず着用し、杖、念珠そして納経帳も必ず持つ。
洋服でお参りの方も、上から「南無大師遍照金剛」とお大師さまのご宝号が書かれた白衣を着ける。
衣装を整える事でお参りに対する気持ちや心構えが随分と変わるものだという。

【詳しくはホームページをご覧ください】
四国八十八ヶ所霊場会ホームページ　http://www.88shikokuhenro.jp/

人間の出会いは運命です

金　夕べ出張から帰りました。100年前に出来た愛媛県の劇場に10年ぶりに呼ばれて踊り、講演会もさせていただきました。10年前は亡くなった主人が運転する車で行きましたが、昨日は日本の弟子が運転する車で、弟子たちと一緒に車2台で行きました。韓国の伝統舞踊を日本の弟子たちが踊りました。これが10年前と変わったことですね。

今、日韓の空気が少し冷たくなってしまっていますが、なんとかしなくてはならない、という気持ちで頑張っているところです。

宇城　本当にそうですね。本日はよろしくお願いいたします。私が金さんのことを知ったのは、2020年オリンピック開催地が日本に決まった日でした。

金　9月8日朝5時ですね（笑）。

宇城　はい（笑）。私はいつも朝3時頃起きるのですが、その日、オリンピックの開催地が決定する日だったので、テレビをつけると、どのチャンネルもそろってオリンピックのニュースばかりでしたが、NHK Eテレだけが別の内容で、「心の時代」という番組をやっていました。その番組に出ていらっしゃったのが金さんでした。その語りに思わず聞きほれました。そして何よりも「日本のことを愛していらっしゃる人だなあ」と感動しました。

その後、金さんの著書『がまんの先には、いいことが待っている』（PHP研究所刊）を読み、そこには日本の素晴らしさだけでなく、故住職との出会い、縁、そしてそのやさしさと愛に金さんが包まれてきたことや、さらには今我々日本人に欠けているところにおいに気づかせてくれる内容が描かれていると思いました。

グローバルな時代にとって、人間としてどういう生き方がいいかということも含めて、非常にお手本になる本だと思いました。それで宇城塾生や空手の門下生たちにも、この本を紹介しました。

こういう経過で今日は金さんにお会いするのを楽しみにして参りました。金さんは、現在ご住職でいらっしゃると同時に一方で、韓国伝統舞踊の人間国宝後継者でもいらっしゃるのですね。

金　はい、私が徳島にお嫁に来た時は、まだ後継者ではなかったのです。日本にお嫁に行くことになった時、まわりからは「日本などに嫁に行くな」とか、「踊りの道からはずれるぞ」などと反対されました。師匠の人間国宝である李梅芳（イメバン）先生にも怒られました。でも、人間の出会い・ご縁は、運命だなと思うんです。今でも私は主人と結婚したことを後悔していません。本当に良かったと思っています。

結婚して5年後、私は祖国に呼ばれて、国立国学院で個人発表会に招待されました。その時に住職が、「金昂先スペシャルツアー」を企画してくれて、韓国に一緒に行く日本の観光客を50名ほど集めてくれたのです。私は準備のために先に現地に行ったのですが、発表会の当日、住職が、きれいな着物を着た日本の方々を連れて劇場にやってきたのです。皆びっくりしていました。そして住職は、日本と韓国の観客の方一人ひとりに、客席にたずねて挨拶してくれたんですね。

その日は、「金昂先が日本に嫁に行って5年後、どんな踊りを発表するのか」と、人間国宝や仲間がみな気にしてくれて、見に来てくださっていた。そうしたら、皆感動してくれて、「僧侶と結婚して僧舞にも重みが出てきた」と言ってくれました。

何より嬉しかったのは、日本人の主人が、日本の観客をたくさん連れて来て、その上、観客席の一人ひとりにまで挨拶して回るその姿を見て、皆がとても感動してくれたことです。そして口々に「結婚して良かったね」と言ってくれた。韓国人間国宝1号である金千興先生は、日本語がすごく上手な方でしたが、それまで一度も日本語を使われたことがありませんでした。でもその時先生は主人に、「ありがとう、これからも金昂先を頼みます」と日本語で言ってくださったのです……。先生は、主人が亡くなった同じ年（2007年）に亡くなられました。

「あなたの舞踊人生は私にまかせなさい」

金　私は小学校3年生から踊りを始めて、以来、「天才」と呼ばれ、プロになってからも、たくさんの賞をいただいたり、いろいろなコンクールに出て大賞をいただいたりして、当時韓国ではすでに名前が売れていました。ですから、徳島県のイベントに呼ばれて来日した時は、まさか私が日本の僧侶と出会い、しかも日本のお寺にお嫁に来て、自分自身が僧侶になるなどとは夢にも思っていませんでした。

人間の出会い・ご縁は、運命だなと思うんです。
今でも私は主人と結婚したことを後悔していません。

土の中に眠る生命（いのち）を待つ全力で〝時〟エネルギーを砂漠の花の工伝えたい

写真家 野村哲也

見渡す限りのパタ・デ・グアナコの花（チリ）
「ひたすら待って、待って、待って……そして、大輪の花を咲かせる。
僕はその待つ力強さに打たれたんだと思います。」

見る人を圧倒する、地球のエネルギーに溢れた写真の数々。
世界中を飛び回り、生命（いのち）の素晴らしさを伝える写真家・野村哲也氏の作品だ。
「写真は撮らせてもらうもの」という野村氏が、被写体から得たたくさんの学びとは何か。
現在、世界を舞台に2年ごとに住む場所を移動するというその自由闊達な活動の原動力を語っていただいた。

2013年10月11日　東京にて

のむらてつや

1974年生まれ。岐阜県出身。高校時代から山岳地帯や野生動物を撮り始め、〝地球の息吹き〟をテーマに、アラスカ、アンデス、南極などの辺境地に被写体を求める。
2007年より、南米のチリに移り住み、四季を通してパタゴニアの自然を撮影。写真はCMや新聞、雑誌などに数多く掲載されている。今までの渡航先は92ケ国に及び、海外の辺境ツアーガイド、TV局やマスコミのアテンドにも携わる。国内では幼稚園から生涯学習センターまで、幅広い年齢層に講演活動を続けている。
ホームページ　http://www.glacierblue.org/home.shtml
ブログ　http://fieldvill.blog115.fc2.com/

砂漠では種は常に〝準備〟している

――世界を舞台に活躍されている野村さんにお会いできるのを楽しみにして参りました。本日はよろしくお願いいたします。

野村さんのご著書『世界の四大花園を行く――砂漠が生み出す奇跡』を読んだ時に、「砂漠」のイメージが一変しました。「砂漠って実は豊かなのだな」と。

最初にその扉を開いてくれたのは、僕が敬愛する、ペルーの天野博物館事務局長の阪根博さん（『道』175号に会見掲載）でした。彼を訪ねてペルーの古道「インカ道」を案内してもらった時に、「もっと面白いものがあるけど、見る？」と連れていかれたのが、砂漠の花園でした。僕は砂漠の花園というのは規模的にペルーを除いたオーストラリア、チリ、南アフリカが三大だろうと思っています。ただ僕の場合は阪根さんが教えてくれたペルーの花園がなければこの三大花園に辿り着くことはなかったので、ペルーを加えて「四大花園」としました。原点だからです。

砂漠の花園の一番の魅力は、やはり生命（いのち）の美しさというか、透明感なんですね。花びらがぞっとするような透明感をもっているんですよ。それが600㎞、つまり東京から岡山間の新幹線両脇に、絨毯のように敷き詰められているのです。圧巻の風景でした……。

砂漠に降る新雪を想起させるホワイトエバーラスティング（オーストラリア）

最初は花園に目を奪われて、花園の写真ばかり20回くらい撮りにペルーに行きました。福音館の『たくさんのふしぎ』という月刊誌に「砂漠の花園」というテーマで写真を載せることになった時に、編集長から「これ、砂漠だということがわからないから、砂漠の風景も撮って来て」と言われました。砂漠なんて別に見たくもないし嫌だなとしぶしぶ出かけました。

ところが見慣れている花園ではない時の砂漠を見た時に、そこからもの凄いエネルギーが湧いている気がしました。その時に初めて「シードバンク（種の銀行）」という言葉の意味を体感しました。土を掘ってみると、もの凄い数の種があるわけです。乾燥しているところなので、この種たちは土の中で10年から15年も待てるのです。湿度の高い日本だと、たぶん種は10年も待つことはできないのだと思います。

待っている種は常に準備をしていて、次の世代に種を残していくために花を咲かせる時を待ちながら生きます。ひたすら待った種は、霧が出たり雨が降ったりなど、自分にとって一番良い状態、一番自分にフィットした時だけにグッ！と出て、花をバコッ！と咲かせて何十倍の種をザッと砂漠に蒔いていくんですね。

ペルーの花園で15年間、同じ日に定点観測をしているのですが、1回として同じ花園はありません。土の中にたぶん層になりながら自分に合うその時をじっと待っているのです。

――一瞬のチャンスを種は捉えるわけですね。

そうです。僕はこの〝待つ〟という、土の中の種のエネルギーに打たれたんだと思うんです。本当に感動しました。

砂漠の中に、その百倍、千倍、万倍の母なる種の生命（いのち）が埋まっている。そのことが砂漠だったからこそ見えたのです。本当に見なければならないのは土の中の生命の母体だった。

みんな自分が芽を出す番になるまで準備をしながらただひたすら待って、待って、待ち続け、ようやく大輪の花を咲かせる。でもそれは人間に「きれい！」と言ってもらうためじゃない。またすぐに次世代に渡すために種になる。その「待つ」という力強さ、その花の姿に僕は圧倒されました。

そんな時、「ペルー以上の花園があるぞ」なんて言われたものだから、それはもう、見ないわけにはいかなくなった。そしてこの本『世界の四大花園を行く』ができたのです。

若者にこそ「待つ」時間を

――自分の一番いい時に花を咲かせるということは人間にもあてはまりますね。

はい、今の時代、生き急ぐ人が多いように感じます。例えば就職ということでも、「俺は絶対に医者になる！」と

師につくし自己を磨き人を育てる

第３回

五感を呼び醒ませ

――鈍化した社会の中で――

神道夢想流杖心会 主宰
松井健二

まつい けんじ
１９３５年、上海生まれ。神道夢想流（しんとうむそうりゅう）杖術及び併伝武術を清水隆次（しみずたかじ）師範に学ぶ。清水師範他界後、福岡の乙藤市蔵（おとふじいちぞう）師範に師事、神道夢想流杖術免許皆伝。
日本古武道振興会 会員
日本古武道協会 会員
全日本剣道連盟 杖道範士八段
東京都剣道連盟 杖道部会会長

写真提供／体育とスポーツ社

我が師乙藤市蔵のちょっとオドロオドロシイ言葉からはじめます。即物主義に染まった現代の皆さんには、あとに続く話もオドロオドロシイ話に思えるかもしれませんが、昔の人間にとっては当たり前、普通のことなのだと思って下さい。

この乙藤先生の言葉は、私と後輩と歓談していた時の言葉です。緊張した場ではないので私の切り返し。「先生ならやるでしょうね。では先生に会いたいと思ったら、裏切れば会えるわけです」「何を馬鹿なことを……」（笑）。

ここで言われている「化けて出る」とは、幽霊になって出るということです。「化け物」という言葉がありますが、大体これは人間以外の「物の怪（もののけ）」の事を言います。宮崎駿の「もののけ姫」の世界、あるいは水木しげるのマンガの世界と考えたら、イメージしやすいですね。

幽霊・幽体の存在

「わしが死んでからお前たちが裏切ったら、化けて出るとよ。わしはその仕方を知っているとよ」

武術においても、一般の生活においても五感ないし六感が大切なのですが、私から見て現代人の感性があまりに鈍化してしまっているのが問題だと思っています。

その問題を語る切り口として、今回は以下幽霊とか幽体の話をしますが、あくまでこれは武術家としての私の実感に基づく理解であり、学者の知識でも、宗教家の理解でもないことをお断わりしておきます。

皆さんは人間の死体の事を「なきがら」と言う事はご存知でしょう。ここで基本となる考え方があります。それは人間は「肉体という器」と「見えない幽体・本体」により形成されているという考え方です。そして死ぬと「霊魂を核とした幽体」が器である肉体から抜け出て霊界ないし幽界に行くとされます。

肉体・幽体の問題については、神智学的理解のほうが良いとは思いますが、神智学は一般的ではないので、本稿で伝統的な肉体・幽体という概念にしておきます。

この幽体は、肉体の中にいて生きている時は少し肉体からはみ出て存在しており、意念が方向性を持つと、その方向に増幅、あるいはずれるようです。ヨガで言う「オーラ」に似ていますが、オーラは生命活動により生じる一種の光ですから、幽体とは違います。仏像における光背は、あれは一種のオーラ表現です。

幽体は、宗教的修行、あるいは武術的修行の結果として「観じる」あるいは「感じる」ことができるようになるようです。この理解があると分かりやすい話があります。

乙藤先生の師である白石範次郎先生は博多の名刹聖福寺の東瀛老師と懇意でした。ある時老師が白石先生に言いました。「わしが切れるか?」

白石先生は「されば」と白刃一閃。頭皮寸前で止めた。老師は微動だにせず、「ほう、切れたのう」と賞賛されたという。皆さんの考えなら、どうせ本当に切らずに止めるのが判っているのだから、「切れた」もないもんだと思うでしょう。でも、これは間違いなく切り、切られたのです。なぜなら、我々ですら肉体から離れた幽体を打たれると「打たれた」という感覚を持ちます。白石先生は老師の本体たる幽体を切り、老師は切られたという実感を持ったはずです。ただ、このようなことは、修行をすれば体現できることですが、無闇にやるべき事ではなく、価値観を持つべき事でもありません。

白石先生の話題になったので、頭書の幽霊の話に戻ります。これも乙藤先生からお聞きした話です。

昔、博多に幽霊屋敷がありました。白石先生は「幽霊退治に行く」と出かけ、その家に入り、夜を待ちました。夜更けになると女の幽霊が出てきた。なんと白石先生は「お前は何故出てくるのか」と尋ね、理由を聞き、「分かった」と言って帰り、幽霊の言い分通りにしてあげた所、その後幽霊は出なくなったと言います。白石先生の腹の座り方、人柄を彷彿とさせます。私の場合はそうはいかない。実際にあった事ですが、怨念に満ちた幽霊に遭遇した時、古武道に伝わる印を結び、呪文を唱え、九字を切り、無言の気合で消すのがやっとのことでした。これでは今度は私が恨まれかねません。

幽霊とは何でしょう。私の考えでは、死ぬ時に何らかの強い念を持って死んだ場合、その念が現世に残り、一定の条件で幽霊という形として見えるようになるのではないかと考えています。見たこともない現代人にとっては、信じるとか信じないという議論で終わりでしょう。しかし、私のように何度か幽霊に遭遇した者としては、別に不思議でもなく「ああ、いるな」と思うだけです。

多分最近の人は「人だま」も見たことがない。昔は死体を焼かずに、土葬といって棺桶のまま埋葬しましたから、しとしとと雨が降る日などは墓で火のたまがふわふわ燃えている光景がよくありました。現代風に言うと、これは死体が墓の中で腐り、発生した燐が燃えるのだと言われますが、結構不気味です。しかも墓から離れた所で、こちらに来たり、去って行ったりするものもあります。さらに説明不能のことで、「狐火」とか「狐の嫁入り」と言われる現象も見たことがあります。文明に毒されない自然の山中では、不感症になった都会人が全く知らないことに遭遇することが多々あるのです。

本誌176号（２０１３春）のインタビューで、私は「異界のものまで見ます」「昔は皆そうだったのです」と言っていますが、異界のものとは時として「もののけ」であり、「幽霊」であり、「人間その他の生命体の精霊」であったりします。この精霊体は暗闇で蛍の光のように見えることがあります。ただし、蛍のように光が増減しません。

興味深いことに、私と滝行を重ねた者の約半数はこの光を見るようになりましたが、自我の強い知識主義の者はそうならない。なぜこういうことを私が重視するのか。

実は、私が学ぶ神道夢想流の巻物においては、次のような歌が添えられているのです。

「清眼の　玉の光を忘れずば　闇にも見える敵のありかは」

これを感得する為の修行が必要なのです。